

アルジェリア人質事件に思う

アルジェリアの人質事件は、軍の突入作戦によって終結した。しかし、その代償は、あまりにも大きく重い。多くの社員や関係者が犠牲になったプラント大手日揮は、アルジェリアが独立した 1960 年代からエネルギー施設の建設に関わり、無二のパートナーとして同国の開発に携わってきた。同社には、アルジェリアで長年働き、親密な人間関係を築き、同国に精通するエキスパートが何人もいる。アルジェリア側も日揮の貢献に、大きな評価をしてきた。それだけに今回の事件は、日本にとってもアルジェリアにとってもやり切れない痛恨の結末である。

今回、日本政府が早い段階で城内実外務政務次官を派遣したのは正しい判断であったと思う。むろん情報収集は極めて重要である。しかし、一气呵成に日本版 NSC（日本版国家安全保障会議）や自衛隊法改正に突き進むのは危険だ。これらが整備されていれば事件が防げたり、事態が改善したとは考えにくいからだ。

テロという言葉をやりに使うのは正しくないが、それでもやはり今回の事件は、暴力によって社会を変えようとするテロ行為だと私は思う。日本はこうした暴力主義に毅然として立ち向かわなくてはならない。ただし、それは目には目、歯には歯というような武力での戦いではない。

日本に求められているのは、貧困の削減、技術協力、産業育成などの民生分野の貢献であり、日揮がこれまで着実に積み重ねてきたような活動である。こうした活動をひたむきに支援することが、一步ずつでも世界から暴力主義を追放することとなり、日本の安全と繁栄に役立つことになるろう。

最後に城内氏は今回のことで男をあげた。自民党の次の次に加わる勢いだ。郵政解散反対、刺客、浪人、復活と常時戦場の城内氏。確か彼のキャッチフレーズはぶれない男だった。ぶれない男、ここ静岡県にも欲しいものだ。

2013 年 1 月
静岡県議会議員
天の一